

滋賀

014

令和8年度 学校推薦型選抜（一般枠）入学試験問題

専門課題 小論文

（初等教育コース 教育文化専攻）

〔注 意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 監督者の指示に従って、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
3. この冊子は問題用紙2枚と下書き用紙1枚です。この冊子と別の解答用紙は1枚です。印刷の不鮮明な箇所などがあれば申し出てください。
4. 解答は解答用紙の指定された場所に記入してください。
5. 解答に字数制限がある場合には、句読点をすべて字数に数えます。
6. この冊子は持ち帰ってください。

問題 次の文章を読んで、多様な人々と共生できる子どもを育てるために学校教育はどうあるべきかについて、あなたの考えを600字以上800字以内で論じなさい。なお、筆者の主張を簡潔にまとめた内容を含めること。

グローバル化が進み、世界共通のビジネスモデルや教育モデルが示される一方で、文化の衝突は思わぬところで起きている。衝突の影響は極めて深刻なのだが、その実態は見えにくく、意識されずに過ぎてしまうことが多い。たとえば母国で優秀な成績を修めた学生が、海外の大学でつまずくことがある。言語や教育方法の違いがつまずきの理由に挙げられがちだが、母国と留学先の作文/小論文の「論理の展開の違い」に根ざした、思考法の違いが原因であることも多い。

この文化による論理展開の違いをいち早く指摘したのは、アメリカの応用言語学者カプランである。カプランは、大学で留学生の小論文指導を行うなかで、英語が上達してもなかなか小論文が上達しない留学生が多いことに長年疑問を持っていた。そこでカプランは世界30カ国以上から来た留学生の小論文を分析し、下図のように言語圏別に論理の展開の特徴を視覚的に分類してみた。

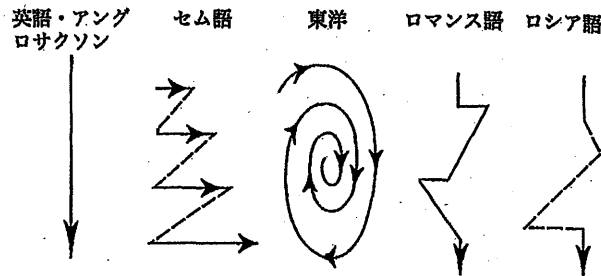


図 言語圏による論理展開のパターン (出所 カプラン (1966) の図より筆者訳)

カプランの分類によれば、英語圏は「直線的」な展開、ヘブライ語やアラブ語などのセム語圏は類似するものがらを詩の対句のように「平行」させて進む展開、東洋は渦巻きのように主題から遠いところより始めて「間接的に主題に近づいていく」展開、フランス語に代表されるロマンス語圏は余談を交えて「紆余曲折」しながら進む展開と分析されている。そして五つめのロシア語圏は、パラグラフ(段落)の間のつながりがパターン化できないとされている。アメリカ人のカプランにとってロシア語圏の学生の論理展開の解釈が困難だった理由としては、ロシア語圏では美辞麗句と慣用的な表現を使って儀式的に書いたり語ったりする伝統的なレトリックが広く用いられていること、また政治的な理由で意見の直接的な表明が差し控えられることなどが考えられる。論理的というと、英語圏の直線的な論理展開が自明で普遍的なものとして受けとめられているが、カプランの分類を見ても、いくつかある型のひとつにすぎないことが分かる。

カプランによれば、読み手が「論理的である」と感じるには、統一性と一貫性が必要であるという。統一性とは、記述に必要な十分な要素があることであり、一貫性とは、それらの要素が読み手に理解可能な順番で並んでいることである(カプラン 1966)。これらを総合すると、論理的であるということは「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」と定義することができる。

ここで重要なのは、「読み手にとって」という部分だ。世界に共通する普遍的な「必要な要素」とそれを並べる「順番」があるわけではなく、読み手がその社会・文化の中で馴染んだ型があり、そこにはいくつかのパターンが認められるということである。カプランが図で示した四つのパターンは、その型を視覚的に表現したものだった。「矛盾のないこと」が論理学の三原則のもとになっているように、前後の内容に矛盾がないことが作文でも重要である。しかし、その形式論理の無矛盾の原則を守った上で、読み手と書き手の間に作文に必要な要素とそれらを述べる順番についての合意が必要だということである。つまり論理的であることは、社会的な合意の上に成り立っているものだといえる。だからこそ文化圏によって違いが現れる。それは、言語や文化に左右されない論理学の形式論理とは異なる「論理」の考え方である。

(中略)

カプランは、「それぞれの文化は文化に特徴的なパラグラフの順番を持ち、言語のこの部分の習得は、その文化の論理システムを学ぶことに他ならない」と述べている(カプラン 1966)。このカプランの主張を各言語の文法の構造とパラグラフの構造の類似から根拠づける人もあるが、「必要な要素とそれを並べる順番」は文法という言語の内的システムのレベルではなく、レトリックが扱う作文/小論文の型(「構造/配置」)のレベルで考えた方がより有益である。各言語の文法の違いが論理の違いの理由だとすると、私たちは異文化で暮らしても母語の影響からずっと逃れられないことになる。しかしレトリックのレベルで考え、異文化の書く型を使いこなすことによって、異なる論理と思考法を手に入れることができる。

カプランは英語で書かれた留学生のエッセイを分析したために、言語圏別に「直線的」、「平行」、「間接的」、「紆余曲折」の四つの論理展開のパターンを特定した。しかし論理のパターンに注目して文化を分類する方法は、言語や国という単位の他にも考えられる。たとえば、どの国(社会/共同体)にも共通して存在しているのが、政治、経済、法、社会という領域である。これらの領域には領域独自の目的と目的達成の手段が存在しており、それらを混ぜて使うことはできない。混ぜて使おうとすれば、道徳的な警鐘が鳴る。

たとえば、経済領域では効率的に最大限の収益を上げることを目的とするが、この目的を政治領域に持ち込むと汚職となり、法領域では違法となり、社会領域では不道徳となる場合が生じる。このように四つの領域は独立して存在しているが、どの領域の論理と価値観を重視しているか、つまり国の統合の原理として採用しているかは、教育、とりわけ学校で教える作文を通して判断することができる。なぜなら、教育は知識や技術を教えるのみならず、当該国の伝統や価値観の伝授を重要な目的として持っているからである。

学校は人間形成という明確な目的を持ち、その目的に向かって子どもを形成（教育）する力が系統的に強く働いている。そのため、子どもたちが将来参加していく社会で正しいとされる行為の型やその背後にある規範、価値観がより明らかな形で現れる。もちろんひとつの国の中でも、地域によって、階層によって、異なる言語や習慣を持つエスニックな共同体によって多様な文化が存在している。しかし、そうした複数の文化的な集団によって構成されている国が、ひとつの国家（社会）として成り立つためには、統合する文化が必要であり、一般には支配層の文化が主流文化として学校（公教育）で教えられていると指摘されている（ブルデュー 2012）。

では領域が異なると何が変わるのだろうか。まず各領域は固有の目的と目的を達成するための手段を持っている。たとえば、経済ならば利益を上げること、平たくいえば儲けることであり、インプットに対してアウトプットの比重が高いことである。その目的達成のためには、計算による数値の比較によって最も効率がよく安価な手段を選択する。この時、早くて安い手段を選ぶことが重要であり、手段の選択に関して道徳的な配慮は後回しになるし、哲学的な考察は全く意味を持たない。それに対して政治領域では、公共の福祉という目的達成のために、何が公共の福祉になるのか、社会を構成する多様な人々にとっての共通善とは何なのか、その「目的自体」を吟味し、公共の福祉・共通善という理念／理想に適った手段を選択する。理念の吟味には哲学的な考察が重要となり、理想の追求には、理念に対する人々の合意が必要になる。

このように価値観とは、何を優先して何を後まわしにするか（犠牲にするか／切り捨てるか）、その順位づけに現れる。そして優先の順位づけは「何を目的とするのか」によって決まる。

価値観に紐づけられた論理を考える時、「どのような論理が各領域で成り立つのか」、そして究極的には「何のために思考するのか」という問いが私たちに突きつけられる。確かに演繹や帰納などの推論の形式、つまり道具としての論理的思考は多様な場面で役に立つ。しかしより本質的なのは、「どの領域のいかなる価値観のもとで思考するのか」という価値の選択と、その価値に合致した論理の使用である。経済の問題として捉えるのか、政治の問題として捉えるのかによって正しい結論と結論に至る道筋は変わってくる。これを単なる制度（領域）の違い、制度固有の表現形式の違いとして受けとめると、私たちはどのような価値観に基づいて思考しているのか、どのような論理を論理的だと受けとめて思考し、判断しているのかに無頓着となり、予期せぬ文化衝突に遭ったり、判断を間違えたりする。

(渡邊雅子『論理的思考とは何か』2024年、岩波書店 一部改変)